



1988

7/17

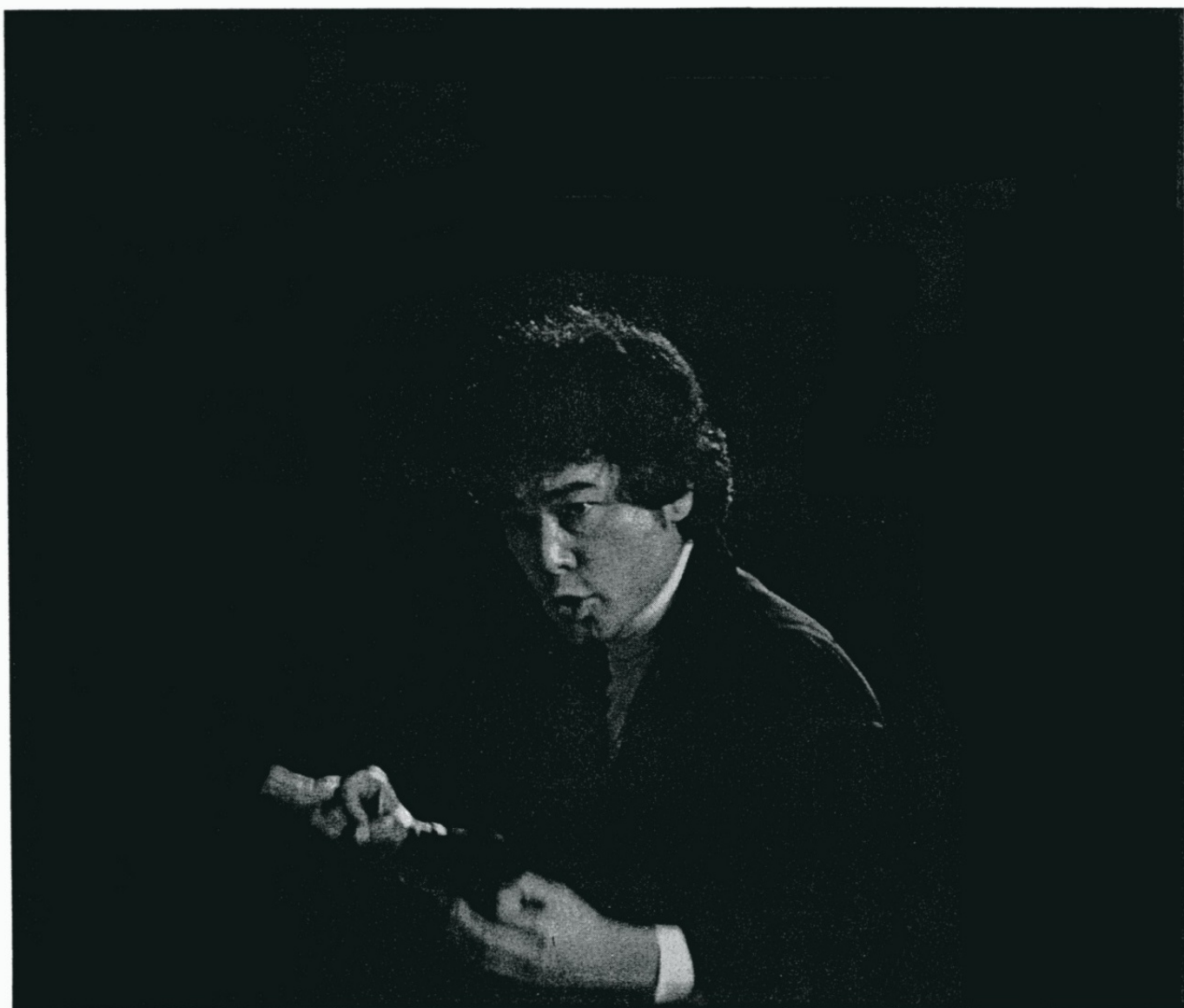
登戸混声合唱団

第1回定期演奏会

登戸混声合唱団

第1回定期演奏会

指揮・片野秀俊



1988年7月17日(日)
川崎市多摩市民館

ファースト・コンサートに寄せて

片野秀俊

1979年12月、多摩川の辺りの街に一握りの人達が寄り添い、クリスマス会が開かれていた。ささやかに数本の小さなろうそくが、しかしとても暖かく輝いていたのがなつかしく想い出される。「登戸混声合唱団」発足の頃のことである。

それからたくさんの出来事と、たくさんの想いが、無数の音群と共に私を訪れ、それらはそれぞれの色をして、今も心にしまわれている。混じり、重なり合いながら、どれもそれぞれの色を失わずに。

日本の合唱団の活動が、世界に比類のないものであることは周知の通りである。100万人近いというエネルギッシュな合唱社会のすみっこに誕生した登戸混声合唱団も、本日第一回の記念すべきコンサートを迎えた。何事かを成し遂げようとする時、10年近い年月は必ずしも長い時の経過ではないのだが、どの団も味わっているであろう運営にあたっての種々の問題を当団も少なからず味わったのと、少しばかり、ゆっくりと構えている団風のせいも、創立9年目の初コンサートになった。とはいえ、ここに

到るまでの道程をつぶさに見てきたつもりの私としては、役員のみならず団員一人一人の願いの結晶を、今、賛美せずにはいられない。

幸福とは、幸福を探すことであるのだとすれば、当団も私も幸福だったのだろう。そして、だから、まだ当分は幸福なのにちがいない。それは恐らく、生きているということでもあるのだろうし。私にとっては、合唱という存在あつての、……そして当団にとっても……。

さて本日、登戸混声合唱団は、その胎動期を脱し、新たな「出発点」に立つのだが、この期にこそ過去9年に対する重要な反省と、己が種まいたことの責任を再認識し、より見事な花を咲かせるべく努力する事を確認したいと思っている。“心がとっても気持ちいい”登戸混声らしさは失うことなく。

あの冬の夜のろうそくの明かりを、なつかしく思い出しながら。また、新たに出会うであろう様々な色の音達を楽しみに待ちながら。

末筆ながら、仕事を通して長い間親しくおつきあい頂いており、本日の演奏会のためにご多忙にもかかわらず、心暖まるメッセージを頂戴した、日本を代表する作曲家・高田三郎先生、合唱指揮者界の重鎮である村谷達也先生に、厚く御礼申し上げる次第である。

「心の四季」について



この組曲は吉野弘さんの詩によっている。彼は山形県出身であって、この曲の詩にも山形の人ならではの内容が出てくる。

それについて次に少し書いて、この演奏をきく人の参考にとと思うのである。

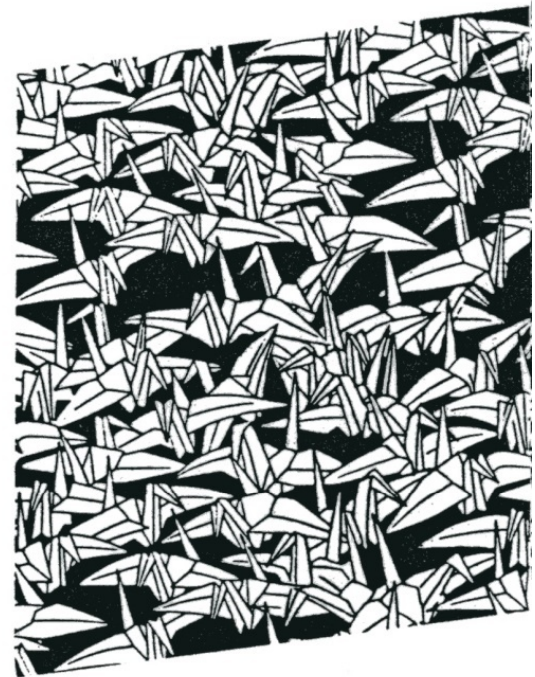
第一曲「風が」の第四節に「雪がすべてをまっ白につつむ。冬がそれだけ汚れやすくなる」とある。まっ白に降った雪になぜ、汚れということばが続くのだろうか。それについて吉野さんは、次のような話をしてくれたのである。

「関東以西、以南では、雪は《祝福》として降る。すなわち、あたりをうっすらと美しく雪化粧して、翌朝はもうとけはじめ、午前中には消えてしまう。しかし、東北、北陸の雪は全くちがう。十一月の終りごろ降った雪は根雪となって残り、翌年の春までとけない。そしてその雪はすぐ汚れはじめるのである。暖房の煙や車のはねる泥やである。その汚れを消そうとでもするように、また白い雪が降ってくる。それはまた汚れ、また降るのである。


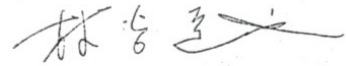
その雪は窓から見ても隣りの家も見えないほど降り、しかもそれが、そのあくる日も、またそのあくる日も同じはげしきで降りつづける。それはまるで、おさえ切れない人間の精神のようなはげしきである」と。

これは第六曲「雪の日に」にもそのままあてはまる。なお、この第六曲の「どこに純白な心などあろう。どこに汚れぬ雪などあろう」についてある人から詩の真意をきかれたので、そのまま吉野さんに伝えたところ、彼は「綺麗な心を持つとうとしている人ほど、こう感ずるのではないでしようか」と答えたのである。ほんとうに純白な心を願いながら生きる人ほど、ここに書かれた雪の苦しみがよくわかるはずと思うのである。

登戸混声合唱団が、片野秀俊さんの指揮により、心からの演奏をし、それがききにきてくださったかたがたの心にとどくよう願っています。



“ノボコン”に



“ノボコン”とは、ほんとうに、いい愛称だね！
ぼくは、ほんとうにすばらしい愛称だと思う。このごろ、なにかというと、せかせかと、テクニクを追いかけているような合唱団が多いのだ。ぼくは、日本のあちこちでコンクールやフェスティバルで、ずいぶんたくさんの合唱を聴く機会があるので、そのたびに、うまいけれど面白くない合唱をさんさん聴かされる。そんなことがあるものだから“ノボコン”が気に入ったのだ。“ノボコン”だって、いつまでも“ノンビリ”のままではない。だって、苦労して練習しているのだから。この精神で、反骨精神でやっていけば、ほんとうの音楽、うたのある合唱団、歌うひと聴くひと幸せを感じる合唱団になっていくはずだ。資料で送ってくれた写真の顔ぶれの、あの顔つきの連中なら大丈夫という気がした。カナで、“ノボコン”と書くから、つい“カメさん型”のイメージになってしまうが、登戸混声の略称ならなんということはない。

無理のない選曲、なかなか立派だ。片野さんがすばらしい花園にしてくれることは、まちがいない。みなさん！ のんびり、しかし勇気を持ってこつこつと登戸？ってください。登戸は登扉、つまり扉に向かって、登って行ってほしいのだ。気永？に期待している！！

ぼくは、去年は長野県の文化使節でウィーンのリムジーク・フェラインの大ホールで、あのカラヤンやマゼールの立った指揮台に立って、正面のパイプオルガンも使って、ブラムスを指揮してきた。今年は、ポーランドの文化庁のお呼びで、ワルシャワで東京の合唱団をつれて演奏してくる。そんなとき、いつも思うのは、合唱の本質についてだ。音楽は、人間の心をやさしく、また幸せにし、勇気づけてくれるものであり、痛みをやわらげ、心を豊かにし、楽しいものであり、うまく歌うということを考えないようにしようと思ったりしている。とても、むずかしいことと思っている。お互いに頑張ろう!!!

村谷達也
社団法人全日本合唱連盟常務理事
日本合唱指揮者協会副理事長
登戸混声合唱団顧問



プログラム

指揮 片野秀俊
 ピアノ 北村江里子

中世の合唱曲

O bone Jesu	Compere
Isbruck	Isaac
Alma Redemptoris Mater	Palestrina
Ave Maria	Arcadelt

—混声合唱組曲—

わたしの季節

春の誕生
 夏の嵐
 こんなに秋の晴れた日は
 雪の夜の思い出

中村千栄子 作詩
 湯山 昭 作曲



休憩

こどものうた

いぬのおまわりさん	佐藤 義美 大中 恩	作詩 作曲
トマト	荘司 武 大中 恩	作詩 作曲
赤いくつ	野口 雨情 本居 長世 片野 秀俊	作詩 作曲 編曲
麦畑	スコットランド 片野 秀俊	民謡 編曲
くもさん	周郷 博 大中 恩	作詩 作曲
バナナを食べる時のうた	佐藤 義美 大中 恩	作詩 作曲

—混声合唱組曲—

心の四季

吉野 弘 作詩
高田 三郎 作曲

- 1 風が
- 2 みずすまし
- 3 流れ
- 4 山が
- 5 愛そして風
- 6 雪の日に
- 7 真昼の星



曲目解説



《中世の合唱曲》

1. おお、よきイエズス (モテト)

ロワゼ・コンペール 作曲

コンペールは、1450年頃に生まれ、1518年に亡くなった作曲家で北フランスのサン・カンタンで活躍していました。

モテトというのは、旧教の教会で歌われる混声四部無伴奏（あるいはオルガン伴奏）の複旋律風な曲ですが、この曲は、四つのパートが時にはポリフォニックに模倣し合い、時にはホモフォニックにとけ合ってゆく美しい作品です。

2. インスブルック、さようなら

(リート)

ハインリッヒ・イザーク 作曲

イザークは、1450年頃に生まれ、1517年に亡くなったフランドル出身の音楽家で、イタリアやドイツで活躍しました。

インスブルックは、1964年に第9回、1976年に第12回冬季オリンピック大会がここで開催されましたので、ご存じの方も多いかと思いますが、チロルの山間の美しい町です。

イザークが長年活躍したインスブルックの宮廷を去るに当たって、美しい町並みや人々との別れを惜しんで作られた美しい曲です。

3. アルマ・レデンブトリス

パレストリーナ 作曲

パレストリーナは、1525年頃ローマ近郊に生まれ、幼い頃から教会合唱団員として

の訓練を受け、ローマの聖マリア・マジョーレ教会、聖ジョバンニ・ラテラノ教会、聖ピエトロ大聖堂などの合唱長あるいは専属作曲家として活躍し、1594年に亡くなりました。

パレストリーナの作品は、現在知られている限りでも、ミサ100曲以上、モテト200曲以上があり、いずれの作品もその清澄さ荘厳さの故に、今日でもローマ・カトリック教会の理想的な教会音楽とされています。

アルマ・レデンブトリスというのは、ローマ・カトリック教会において、聖務日課の、「寝る前の祈り」に際し、結びの歌として用いられる聖母賛歌の一つです。

4. アヴェ・マリア

G.P.da アルカデルト 作曲

アルカデルトのアヴェ・マリアはシューベルト、グノーのアヴェ・マリアと並んで有名な曲です。

アルカデルトは、1500年にイタリアに生まれ、1568年に亡くなりました。

彼は宗教作品も多く残していますが、最も本領を発揮したのは、マドリガーレとシャンソンという世俗作品の分野でありました。

このアヴェ・マリアも、もとは彼の三声シャンソン「男たちが恋を誇りにすることを」が、19世紀になって四声宗教曲に編曲されたもので、彼のオリジナルの作品ではありません。



《わたしの季節》

中村千栄子 作詩

湯山昭 作曲

「わたしの季節」は、春夏秋冬をテーマにした4曲「春の誕生」、「夏の嵐」、「こんなに秋の晴れた日は」、「雪の夜の思い出」によって構成されていますが、これらの曲はもとと組曲として作曲されたものではなく、

「夏の嵐」と「雪の夜の思い出」は1965年に、「春の誕生」と「こんなに秋の晴れた日は」は1966年に、それぞれピースとして発表されたものです。

これらの曲を、湯山昭が無伴奏混声合唱曲集「アカペラの響き」に収録するに当たり、一部改訂を加えたうえ、季節感を軸に配列し、新しい装いの合唱曲として誕生したものです。

なお作曲者は、この曲集の巻頭において、合唱の醍醐味は“アカペラの響き”つまり無伴奏で歌われる合唱に、その最大の魅力があるといっても過言ではないと述べています。



《こどものうた》

1. 大中恩の作品から

いぬのおまわりさん

トマト

くもさん

バナナを食べる時のうた

日本の古い子守唄や童謡には、何かもの悲しさを感じさせるものが多い中で、この4曲はなんと明るく、楽しい曲でしょう。

特に「バナナを食べる時のうた」はルンバのリズムに乗って、トランペットやボンゴの音を模しながらの演奏で、テノールにちょっと趣向があります。

2. 赤いくつ

野口雨情 作詩

本居長世 作曲

片野秀俊 編曲

本居長世の1921年の作品を、今回は片野秀俊の編曲で演奏いたします。

本居長世は、この他「めえめえ小山羊」、「七つの子」、「十五夜お月さん」、「青い目のお人形」等、感傷的な親しみ易い沢山の童謡を作曲いたしました。

3. 麦畑

スコットランド民謡

片野秀俊 編曲

小学唱歌の「夕空晴れて」として広く親しまれているスコットランド民謡「麦畑」を同じく片野秀俊の編曲で演奏いたします。



《心の四季》

吉野弘 作詩

高田三郎 作曲

この曲は、NHK名古屋放送局からの委嘱作品で、1967年に合唱・名古屋放送合唱団、指揮・石丸寛によって放送初演されたものです。ちなみに、同じく高田三郎作曲で、皆様よくご存じの「水のいのち」はTBSの委嘱によって作曲され、当合唱団の指揮者・片野秀俊が主宰する日本合唱協会によって1964年に放送初演されたものです。

- 曲は、
- 1 風が
 - 2 みずすまし
 - 3 流れ
 - 4 山が
 - 5 愛そして風
 - 6 雪の日に
 - 7 真昼の星

の7曲によって構成されていますが、この組曲の中心は第6曲の「雪の日に」にあると思われまます。

この曲は出だしからfが20小節もの間持続するのですが、作曲者から今回の演奏会に当たって書いていただいた文中にありますように、東北地方の雪が、おさえ切れない人間の精神のように、はげしく、いつまでもいつまでも降り続ける様を表したものです。



プロ合唱団・日本合唱協会（通称・日唱）指揮者。昭和45年、同団へ入団。Bassのソリストメンバーとして活躍するとともに、オペラやリートのステージでも活動。48年より同団のBassパートマスター、53年から59年まで団内指揮者兼コンサートマスターを務め、60年4月からは日本合唱協会正指揮者に就任して指揮界にデビューし、現在は日唱メンバーを率いて全国で公演を行っている。一方、アマチュア合唱団の育成にも力を注ぎ、各地の合唱団の常任指揮、講師、コンクールや合唱祭の審査・講評を務めており、常任指揮をつとめている団を統合した会「アミーチ・デル・カント」146」を結成、3年毎に定期演奏会を開催している。

また、邦楽、洋楽の室内アンサンブルの指揮も多く、東京ゾリステンのコンサートでモーツァルトを指揮して好評を得るなど、活動は合唱部門に留まらない。日本演奏家連盟会員、日本バウハアカデミー協会会員、日本合唱指揮者協会会員、日本合唱協会主宰、正指揮者。

指揮法をヘルムート・リリング 山田一雄 荒谷俊治 諸氏に、声楽を下八川圭祐 天野秋雄 芳野靖夫 工藤博 諸氏に師事。福島県いわき市出身。

ごあいさつ

歩みはじめてから九年の歳月を経て、私ども“のぼこん”は、旅出をむかえました。この九年間を支えてきたのは、私どもの力ではなく、片野秀俊先生の愛情（情熱あふれるご指導と、じっくり待って下さった忍耐）のたまものにはかなりません。記念すべき第一回演奏会にあたり、改めて、心からの感謝を捧げる次第です。

本日の演奏曲のひとつ「心の四季」の中に、《人は見えない時間にみがかれている》とあります。私どもも、この長い時間の経過によってみがかれてきた、と考えていいのでしょうか。毎週一回、集い、歌う二時間は、一人一人の生

活の中で、心の中で、重さと輝きを持つものになっています。それぞれの人生に、豊かな彩りを作っていると書いてもいいでしょう。ここで得ることのできた、多くのすばらしい巡り合いと、あたたかい絆を、大切に思います。

ささやかな演奏会ではありますが、私どもの新たな門出にあたり、高田先生、村谷先生のメッセージを頂いたのは、望外の喜びでございました。心にしみるおことばと、せっかくご来場くださいました多くのみなさまのお励ましを胸に、“のぼこん”は、今新しい第一歩を踏み出します。今後とも宜しくお願い申し上げます。

1988年7月17日

登戸混声合唱団

——出演メンバー——

★Soprano

米田幸恵
寺沢友美
宇田川敏子
吉田智子
日下久江
島村好美
太田千代子

久保比早子
渡辺和子
高見利恵
矢野真子

★Alto

山下房子
間部弘子
根村道子

海老沢和子
吉田ヒサ子
中山香生
常田响子
田中瑞枝
猪間蓉子

★Tenor

高松昭一
荒居国雄

大村昌良
平義幸
渡辺富貴夫

★Bass

西田和夫
広幡富夫
千枝比呂樹
佐藤孝史
渡邊保

■休団中 桜井尚子 入江真知子 宮地明彦 小林道治



ピアノ 北村江里子

昭和62年 桐朋学園大学音楽学部ピアノ科卒業。小松美枝子 杉山千賀子 田辺融 三宅洋一郎 各氏に師事。

室内楽・二重奏を 篠崎功子 須田真美子 徳永兼一郎 各氏に師事。

昭和62年 ザルツブルグ夏期講習に参加。H. グラーフ氏に師事。

現在、多数の合唱団のピアニスト。また、室内楽、伴奏などで数多くのコンサートに出演。

今年の9月には、新宿の安田生命ホールで、ジョイントコンサートを行う。



登戸混声合唱団 団員募集中

指導・片野秀俊

練習場所・主に「多摩市民館」
練習日・毎週火曜日pm7:00~9:00

TEL(044)977-6193 山下

表紙「多摩川の花火」写真提供・東急電鉄㈱

題字 山下房子/デザイン 根村利生

登戸混声合唱団

第1回定期演奏会

指揮・片野秀俊

1988年7月17日(日) 午後2時開演

川崎市多摩市民館



登戸混声合唱団・連絡先TEL(044)977-6193 山下